



コレクション展1 Inner Cosmology

2021年6月15日(火)～
11月3日(水・祝)

展覧会名	コレクション展1 Inner Cosmology
会期	2021年6月15日(火)～11月3日(水・祝)
休場日	毎週月曜日(ただし8月9日、9月20日、11月1日は開場)、8月10日、9月21日
開場時間	10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで) ※観覧券販売は閉場の30分前まで
会場	金沢21世紀美術館 展示室1～6
料金	一般 450円(360円) / 大学生 310円(240円) / 小中高生無料、65歳以上の方 360円 ※()内は団体料金(20名以上) ※美術奨励の日(会期中の毎月第2土曜日)及び市民美術の日(11月3日)は 金沢市民の方は本展を無料でご覧いただけます(要証明書の提示)。 ※前売り券の販売はありません(当日窓口販売のみ)。
主催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]
助成	公益財団法人 野村財団 NOMURA 野村財団
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL: 076-220-2800

本資料に関する
お問合せ

金沢21世紀美術館 事業担当: 立花由美子・高橋律子
広報担当: 齊藤千絵・石川聡子・落合博晃
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
<https://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



展覧会概要

日々の暮らしの中で、自分たちの力ではどうにもすることができないことがたくさんあります。そうしたことに直面するとき、人々は特定の神仏や森羅万象に宿る神々に思いを告げたり、自分自身の心に問いかけることで、自分だけでは到達することのできない果てしない宇宙に身を浸し、その超越的な力をたよりに、日々の変わらない幸せを願いながら生活を営んできました。私たちの暮らしに寄り添うように、昔も今も私たちの日々の近くには様々な祈りや宗教、内省的な営みがあります。

美術や音楽、そして踊りといった芸術の1つの源泉もこうした日々の営みのそばにありました。見ることでできない世界を現前させる芸術は、人々を果てしない宇宙へと導くメディアとしての機能を担っていました。そうした芸術の役割は、時代が変わっても私たちが日々の安寧を願い暮らし続ける限り、形を変えて現代美術にも表れているのではないのでしょうか。本展では、当館のコレクション作品を中心に「宗教」「祈り」「内省」をテーマに現代美術を読み解きます。

この展示を通じて、さまざまな「宗教」「祈り」「内省」の形から垣間見る世界中のあらゆる文化を見つめる機会を持つことで、今日の美術に新たな視点を示すばかりでなく、そうした多様な宗教文化への理解を促す機会となることも期待します。

展覧会の特徴

世界の現代作家12名の視点から、 「宗教」「祈り」「内省」をテーマに現代美術を読み解く

本展は、東欧、西欧、中東、アジアなど文化的背景の異なる地をそれぞれの制作拠点とした、現代作家12名によるコレクション作品を中心とした展覧会です。作品のメディアは、絵画、写真、映像、立体、オブジェ、インスタレーションなど実に多岐にわたります。鑑賞者は、作家それぞれの世界観や宗教観が投影された展示空間に身を置くことで、日々の生活に息づく祈りや宗教、内省的な営みを想起し、それらが内包する複雑かつ豊かな多様性を感じ取る機会に誘われることでしょう。

現代に続く人々の宗教的な営みと芸術の根源的な役割に着想を得た展覧会

本展は、日々の幸せや安寧のため、人々が古来より暮らしのなかで捧げてきた祈りの行為と、それを支えるメディアの一つとして芸術が果たしてきた役割に着想を得た展覧会です。見えない世界を表出させ、人々を果てしない宇宙へと導く媒介者としての芸術は、時代を超え、今なお人々の内面的な生活を支える機能の一端を担っていると本展キュレーターは考察します。本展を通じ、鑑賞者は、現代美術の作品世界においても、こうした芸術が果たす根源的な役割を見いだすことができるでしょう。

地域社会における宗教的対話と異文化理解を促す関連プログラムを開催

多様性への理解と受容を副次的なテーマとする本展では、文化的・宗教的価値観の異なる参加者を募り、各自の視点からみた作品世界についての多角的な解釈や、垣根のない対話を誘う場を展覧会場に創出します。また、ダークツーリズムや食をキーワードとした体験的な学びを促す参加型イベントの企画を通して、互いの文化的アイデンティティの違いや共通点を探り、異文化間における相互理解を深める一助となる関連プログラムを開催します。

出品作家 (アルファベット順)

ジャン・ダグデレン	向井山朋子+レニエ・ファン・ブルムレン (招聘作家)
モートン・フェルドマン (招聘作家)	シリル・ネシャット
ファブリス・イペール	ゲルハルト・リヒター
加藤泉	ピピロッチェ・リスト
草間彌生	武田竜真 (招聘作家)
アナ・メンディエータ	ボグラーカ・エーヴァ・ゼレーイ (招聘作家)

出品作家紹介

ジャン・ダグデレン Canan DAGDELEN

1960年イスタンブール(トルコ)生まれ、ウィーン(オーストリア)在住。20歳でウィーンに渡り、今でも同地で暮らすダグデレンは、「故郷」や「家」をテーマとし、軽やかでありながら強いメッセージを発する作品を制作する。イスラム圏のブロック建築や宗教建築、美術やカリグラフィーなど、自身の出生地域の文化ルーツへの参照をもとに、しなやかな感性で作られた造形が特徴的である。国境、民族、文化などに関する人間の帰属やアイデンティティの観点から、作品において批評的に提示される。

本展で展示する《アット・ホーム・ドット》は、作家のルーツであるイスラム教圏における伝統的な建築を抽象化したイメージを、546個の磁器の球体で表現する。



ジャン・ダグデレン《アット・ホーム・ドット》2004
磁器、ワイヤー
H200×W200×D200cm
金沢21世紀美術館蔵
© Canan DAGDELEN
photo: WATANABE Osamu

ファブリス・イベール Fabrice HYBERT

1961年ルソン(フランス)生まれ、パリ在住。社会との関わりに強い関心を持ちながら、オブジェ、ドローイング、絵画、映像、パフォーマンスなど様々な形式を用いて活動する美術作家。平凡な日常行為に疑問を投げかけ、新たな視点を切り開く作品を制作。個人放送局の運営、「UR(無限責任)」という名の会社を設立してのマルチプル販売、他のアーティストの支援など、メディアや美術を流通させる制度の変革にも取り組む。

収蔵後初めて展示される本作は、新しいコミュニケーションが育まれる装置として作られた作品で、テレビスタジオに見立てられたこの場から様々な議論や関係性が広がっていく作品である。本展ではこの作品を通じてあらゆる宗教文化の垣根を越えて人々が対話する場が生み出される。

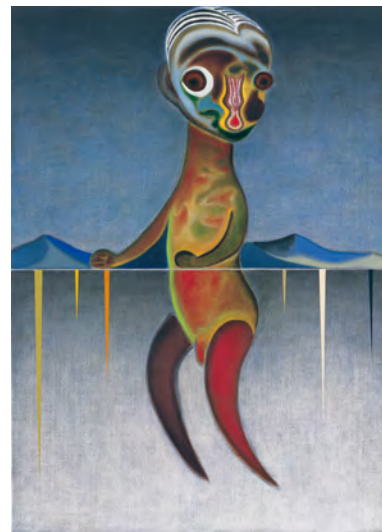


ファブリス・イベール《コクーン》1999
素描、水彩 / ライスペーパー(カミヤツデの木の髄から作る薄い上質紙)、彩色した木
H180×W600×D600cm
金沢21世紀美術館蔵
© Fabrice HYBERT
photo: KIOKU Keizo

加藤泉 KATO Izumi

1969年島根県(日本)生まれ、東京都在住。1992年、武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。2000年代以降、国内外の個展・グループ展での発表、特に第52回ヴェネツィア・ビエンナーレ(2007年)への招待出品で注目される。

加藤が描く大きな頭、小さな手足、丸みが強調されたお腹を持ち、離れ気味な丸い目がどこか遠くを見つめる表情が印象的なプリミティブな人体像は、原始的な芸術やアニミスティックな信仰をも想起させる。2000年代半ばからは木彫彫刻も手掛け、また近年ではソフトビニール等の異素材も取り入れつつ、不思議な生命感を漂わせる立体作品も制作している。本展では当館が所蔵する加藤の代表的な人物像を一堂に展示する。



加藤泉《無題》2012
油彩 / カンヴァス
H224×W162cm
金沢21世紀美術館蔵
© KATO Izumi
photo: SAIKI Taku

草間彌生 KUSAMA Yayoi

1929年長野県(日本)生まれ、東京都在住。50年以上にわたって創作活動続ける草間彌生は、国内外の美術に多大な影響を与えてきた作家である。1950年代初頭より国内で作品を発表し始め、1957年に渡米。その後、活動の拠点をニューヨークに据え、インスタレーション作品や様々なパフォーマンスを展開していく。1973年に本格的に日本に帰国し、現在に至る。幼い頃からの自身の体験を絵に表すことを原点に、大規模な平面、立体、空間作品を展開し、特に、反復的で増殖的なドットや網の表現は、草間独自の世界像である。

本展で展示する《I'm Here, but Nothing》は、ブラックライトによって発光する無数のドットによって空間が覆い尽くされたインスタレーション作品で、まるで鑑賞者自身も消えていくかのような無限の世界が現れる。



草間彌生《I'm Here, but Nothing》2000-
ミクスト・メディア・インスタレーション
サイズ可変
金沢21世紀美術館蔵
© Yayoi Kusama
photo: WATANABE Osamu

アナ・メンディエータ Ana MENDIETA

1948年ハバナ(キューバ)生まれ、1985年ニューヨーク(米国)にて逝去。社会主義体制への移行に伴い、12歳でアメリカに移住。当時新しい美術分野の教育拠点となりつつあったアイオワ大学で美術を学び、自らのリアルな身体が繰り広げるパフォーマンスを記録した写真や映像作品の制作を始める。彼女にとって故郷キューバの代替地であったメキシコ滞在をきっかけに、自らの民族的アイデンティティとともに、古代文明、土着文化の伝統を強く意識し、これらの文明や伝統に見られる図像を作品内に取り込んだ「シルエット・シリーズ」として知られる連作に取り組み始める。これらの傾向を集約し、そこから飛躍する活動を1970年代の前半より生涯を通じて行い、自らの活動を「アース・ボディ・ワーク」と呼んだ。

本展で出品する作品の1つ《魂、ファイヤーワークのシルエット、オアハカ、メキシコ》は自らの身体を象ったオブジェが燃え尽きる様子を捉えた映像作品で、彼女の制作の特徴を端的に表した作品である。



アナ・メンディエータ
《魂、ファイヤーワークのシルエット、オアハカ、メキシコ》1976
スーパー 8 カラーフィルム(無声)よりDVDへ変換
2分22秒
金沢21世紀美術館蔵
© The Estate of Ana Mendieta Collection, LLC
courtesy: Galerie Lelong, New York

向井山朋子+レニエ・ファン・ブルムレン

MUKAIYAMA Tomoko + Reinier van BRUMMELEN

オランダ、アムステルダム在住のピアニスト/美術家/ディレクター。1991年国際ガウデアムス演奏家コンクールに日本人ピアニストとして初めて優勝、村松賞受賞。近年は従来の形式にとらわれない舞台芸術やインスタレーション作品を発表。女性性を核に身体性、セクシャリティ、境界、記憶、儀式、時空など異なるテーマを横断する作品の制作・発表を続けている。

本作は2018年オランダ・テルスヘリング島のウーロル・フェスティバルでの世界初演後、高知県立美術館、神津島にて行われた《雅歌(GAKA)》をもとに作成された。音楽、踊り、歌、祈りを交えたこの現代の儀式はレニエ・ファン・ブルムレンと協働で独立した映像作品として生まれ変わった。



向井山朋子+レニエ・ファン・ブルムレン
《雅歌(GAKA)》2020
フィルム
24分5秒
© Tomoko Mukaiyama + Reinier van Brummelen
Producer: SeriousFilm

シリル・ネシャット Shirin NESHAT

1957年ガズヴィーン(イラン)生まれ、ニューヨーク(米国)在住。1974年に渡米、大学で美術を学ぶ。卒業後、ニューヨークに移り、拠点とする。1990年、渡米後初めてイランに戻り、1979年の革命後の祖国の状況に触発され、特に女性を取り巻く状況を主題とする作品制作を始める。1993年、殉教を題材に、チャドルに身を包まれた女性を撮り、目や手のひらなど体の露出部分にペルシャ語を書き加えた写真シリーズ「アラーの女たち」を発表。1996年から映像を用い、3部作といわれる音と映像によるインスタレーション作品《荒れ狂う》(1998年)、《歓喜》(1999年)、《熱情》(2000年)を発表。2009年《女たち》でヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞を受賞。

本展では映像作品《歓喜》制作時に撮影された一連の写真作品を展示する。《歓喜》は3部作の1つで、イラン人作家モニル・ラヴァニプールによって書かれた『アール・イ・ガルク』(溺死を恐れぬ果敢な人)という小さな村での黙示録的な物語から着想を得て制作された作品である。

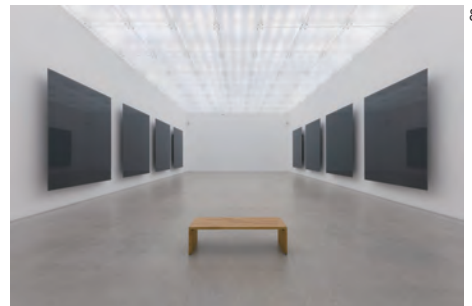


シリル・ネシャット《無題(歓喜シリーズ)》1999
ゼラチン・シルバー・プリント
H38.1×W57.1cm
金沢21世紀美術館蔵
© Shirin NESHAT

ゲルハルト・リヒター Gerhard RICHTER

1932年ドレスデン(ドイツ)生まれ、ケルン在住。東ドイツで美術教育を受けた後、西ドイツ旅行中に出会った抽象表現主義に強い影響を受け、ベルリンの壁のできる半年前にデュッセルドルフへ移住。1962年に新聞の写真をもとにした《机》を発表。以後、あらゆる存在を反映する基盤として「シャイン」(光、見せかけ、仮象)をテーマに、高度な絵画技術をもって多様なスタイルを行き来しながら、可視性と不可視性、写真と絵画、現実と虚構との境界を行き交い、「見ること」を探求し続けている。

本展で展示する《8枚のグレイ》は「ミラー・ペインティング」シリーズの代表作で、グレイの色が施された8枚の大ガラスが鑑賞者に「見る」という行為を促す。吸い込まれるような作品を見ることを通じて、鑑賞者は自分自身をも見つめることになる。



ゲルハルト・リヒター《8枚のグレイ》2001
エナメル塗料を施したガラス、鋼鉄製部品
各H320×W200×D30cm(8点組)
金沢21世紀美術館蔵
© Gerhard RICHTER
photo: WATANABE Osamu

モートン・フェルドマン Morton FELDMAN

1926年ニューヨーク(米国)生まれ、1987年同地にて逝去。図形譜とよばれる、五線譜ではなく、自由な図形を用いて書かれた楽譜の発案者として知られる。ジョン・ケージとならび、20世紀のアメリカ実験音楽を代表する作曲家の一人で、日本の現代音楽にも極めて大きな影響を与えた。音楽に限らず、文学・美術の領域の芸術家との交流を重ね、特に抽象表現主義の作家との交流は、代表作の1つ《ロスコ・チャペル》(1971年)の作曲に繋がった。

本展で出品する作品《ロスコ・チャペル》は、1971年ヒューストン(米国)のメニル・ファウンダーションの依頼で制作された曲で、マーク・ロスコが描く14枚の絵画を設えた8角形の瞑想室に捧げられた。本展では、当館コレクションのゲルハルト・リヒター《8枚のグレイ》の空間とあわせて、没入感のある空間を作り出す。

ピピロッチェ・リスト Pipilotti RIST

1962年ラインタール(スイス)生まれ、チューリヒ在住。グラフィック・デザイン、写真、ビデオ、アニメーション等多岐にわたる分野の習得、さらにロックバンド活動等の経験がピピロッチェ・リストの作品の独自性を際立たせる。体の部分を極端にクローズアップさせ、また故意に歪ませ不快感を煽るアングル、ラディカルでコミカルな人の行動の描写と、ポップで流動的な色彩に満たされた映像・音楽とが融合した表現が特徴的である。

当館の恒久展示作品の1つで展示ゾーンのトイレに設置されている《あなたは自分を再生する》は、トイレという誰もが必要とする浄化の場所を神聖な空間(聖堂)と見立て、30センチメートル四方の祭壇である。鑑賞者はトイレという日常の場にいながら、神秘的な世界に身を置くこととなる。



ピピロッチェ・リスト《あなたは自分を再生する》2004
金沢21世紀美術館蔵
© Pipilotti RIST
courtesy the artist and Hauser & Wirth
photo: SAIKI Taku

武田竜真 TAKEDA Tatsuma

1988年熊本県天草郡生まれ、ベルリン在住。2013年、多摩美術大学卒業後に渡独。ドレスデン美術大学にてマルティン・ホナートとカールステン・ニコライに師事し、2020年、同大学マイスターシューラー課程修了。隠れキリシタンの地の1つである天草地方で生まれ育った背景から、宗教や信仰の移動と変化、またそれらを運ぶ/受け入れる人の営みに関心を寄せる。人類学的視点を介在させ、歴史や美術史への再解釈を行いながら、絵画、立体、インスタレーション、映像といった様々なメディアを用いて、今日の多様な世界が内包する共通言語を探求している。

本展では自身のルーツに立ち返り、隠れキリシタン信仰をテーマに新作を制作する。



武田竜真《The Eye of a Needle》2021
クレート、スタイロフォーム、ビデオ
サイズ可変
作家蔵
© Tatsuma Takeda
Photo: WATANABE Osamu

ボグラールカ・エーヴァ・ゼレーイ Boglárka Éva ZELLEI

1993年ブダペスト（ハンガリー）生まれ、現在同地在住。ハンガリーのカポシュヴァール大学で写真を学んだ後、国立モホリ＝ナジ芸術大学で修士号を取得。今日のスピリチュアリティや変容する宗教のあり方を、写真作品の制作を通じて探求している。2018年、New East Photo Prizeのファイナリストに選出されたほか、Pécsi József Photography Grantを獲得。2020-2023年、ハンガリー芸術アカデミースカラシップを獲得。活動の幅を広げている。

本展出品の《Seekers》は、現代社会とスピリチュアリティの今日の関係性を探った作品で、世俗的な社会にありながらも未だ残る今日の宗教的イメージを映し出そうとする。



ボグラールカ・エーヴァ・ゼレーイ《Seekers》より 2018-
インクジェットプリント
作家蔵
© Boglárka Éva Zellei

関連プログラム

会期中を通じて、金沢市内の宗教コミュニティとの協働イベントや、金沢の宗教遺産をダークツーリズム研究の第一人者である井出明氏と巡るツアーなど、多様な宗教への理解を深めるためのさまざまなイベントやワークショップの開催を予定しています。最新情報は当館ウェブサイトをご確認ください。

市民無料の日

美術奨励の日

会期中の毎月第2土曜日

6月12日、7月10日、8月14日、9月11日、10月9日

市民美術の日

11月3日

※上記の日には、金沢市民の方は本展を無料でご覧いただけます（要証明書の提示）。

広報用画像

画像1～11を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、当館プレスルームの画像提供ページからお申し込みください。

https://www.kanazawa21.jp/form/press_image/

【使用条件】

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。

※アーカイヴのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。